様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月２３日現在

機関番号：32665
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22320143
研究課題名（和文）　18-19 世紀北・東北アジアにおける交易路と交易システムの研究
研究課題名（英文）　Study of the trade route and system in the North Asia and the North East Asia between the 18th century and the 19th century

研究代表者
加藤　直人（ KATO NAOTO ）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：90130468

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国とモンゴルを結ぶ交易路、アムール川からサハリンにかけての交易路、北部満洲から内モンゴルにかけての交易路、中国西部のウイグルや四川省における交易路の現地調査を行った。その結果、旅蒙商をはじめとした各ルートでの交易が、現地先住民族や自然環境に大きく規定されて展開していたことと、その交易システムを中核とした現地社会構造が清朝統治を越えて、20 世紀前半期まで継承されていく側面を持つものだったことも確認できた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we performed the field work of the following routes ; trade road between China and Mongolia, trade road from Amur to Sakhalin, trade road between northern Manchurian and Inner Mongolia, trade road in Sichuan and Uygur . As a result, we got the following knowledge; (1)The trade of each route was greatly prescribed in an aborigine and natural environments.(2) The local social structure that assumed a trade system the core was succeeded to until the first half of the year in the 20th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2011 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2012 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総　計	11,500,000	3,450,000	14,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：中央ユーラシア史

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的な背景であるが、次の経緯を経て研究開始に至った。

まず、研究代表者と同分担者および連携研究は、平成 11 年度より平成 21 年度までの 11 年間、「中華世界の成立一 l8 世紀における狩猟・牧書・農耕文化圏の接触と融合」＜基盤研究(A)一般、研究代表者：細谷良夫、平成平成 11 年度~平成 13 年度＞、「中華帝国の中央と周縁一現代東アジアの原型を求めて」＜基盤研究(B)海外学術調査、研究代表者:細谷良夫、平成 14 年度~平成 17 年度＞、「北・東北アジアにおける社会・文化変容の研究一同じルーツをもつ人々と「国境」一」＜基盤研究

(B)一般、研究代表者:加藤直人、平成 19 年度~平成 21 年度＞等の科学研究費の補助を受け、中国、内モンゴル、中国東北、ザバイカルを中心とするシベリア、プリャート、ロシア極東等における歴史文献調査と現地資料調査を実施し、その成果を公にしてきた。

次いで、平成 l8 年 9 月に、 ロシア・ザバイカル教育・人文大学コルスン助教授と中国社会科学院近代史研究所の劉小萌研究員を招いて、「アムール川流域から見た露清関係」と題する国際シンポジウムを開催した（於日本大学文理学部)。更に、平成 19 年度から 21 年度までは、中国・モンゴル両国にまたがるアルタイ地区に生活するウリャンハイ人に聞き取りを行う一方、 ウラジオストク周辺における「民族」関係資料の収集等を実施した。その成果として、平成 21 年 5 月には、連携研究者の中見立夫を中心に、東方学会主催の第 54 回国際東方学者会議において「清朝とその隣邦」というパネルを開き、国内外からきわめて多くの参加者を得た。

また、研究代表者は、清代文書史料の研究において、過去に科学研究費の補助を受け、とくにロシア外交で用いられた清朝の第一公用語である満洲語で記された文献について研究を重ねてきた。

本研究は、以上の現地調査と文献調査の研究成果の上に、従来の研究が十分追究してこなかった、現地調査と文献調査の総合的な融合による対象分析を、従来の研究において「辺境」として等閑視される傾向があった地域において展開していくことを念頭に構想・実施されたものである。

２．研究の目的

本研究は、１８～２０世紀の北、東北アジアの各地を結ぶ交易路、とくに水系路、隊商路等とそれにともなって成立した交易システムに関する諸問題について、文書資料を中心とした文献研究と、現地での資料収集による調査研究とを融合することにより解明しようとするものである。

近年、海によって隔てられた地域が交易などをとおして結びつけられていくシステムに関する、海域論研究が注目されているが、本研究では、それらの成果を踏まえ、北、東北アジアの自然発生的、歴史的、そして政治的に設けられた「交易路」をもとに、交易システムの存在と、その展開について検証し、交易システムによって現地に生じた文化・社会変容について、文献研究と現地での資料収集をもとに検討を加えることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、現地調査と文献調査の融合を方法的な特徴として実施されたものであるが、具体的には、主に以下の３つの研究方法をとった。

（１）現地調査に先立ち、先ず、当該地域における文献調査を、東洋文庫等での資料調査を中心に実施した。その際、漢語文献はもとより、現地交易システムに関与した諸民族にかかわる文献（ロシア語、モンゴル語、満洲語）の調査を積極的に実施した。

（２）その上で、後述の「４．研究成果」で詳述した、北・東北アジアにおける交易システムの主要な担い手となった旅蒙商が展開したルートの踏査をおこなった。その際、現地の調査を上述文献調査データと対照しつつ史跡の調査を実施すると共に、現地の博物館・資料館も積極的に訪問し、資料調査・収集をおこなった。また、可能な限り、現地研究者との学術交流もおこない、現地における最新の研究成果獲得にも務めた。

（３）以上の、文献調査と現地調査の成果を比較対照・考察しつつ、従来の資料理解および研究成果における問題点の摘出と新たな実証的な成果の提出を図る。

４．研究成果

各年度における研究成果は以下の通りとなっている。

（１）平成 22 年度

主な研究成果としては、次の二点をあげることができる。

一つは、中国とモンゴルを結ぶ交易路、具体的には、「旅蒙商」と呼称された山西商人の対モンゴル交易活動ルートに関する現地調査による成果である。研究代表者と連携研究者（華立、柳澤明、楠木賢道、杉山清彦）は、＜北京－太原－大同－フリングルーフフホトー張家ロー北京＞のルートを実地に踏査し、太原市博物館(文廟)、山西省博物館、平遥、大同博物館、大同旧街、雲崗石窟、威遠堡、殺虎口、内蒙古博物館、大召、席力図召、大鏡門、宣化城、鶏鳴駅村、等々の関連史跡の調査と現地専門家からの現地実態および研究状況に関する聴き取り調査をおこなった。これらの調査を通じて、清代「旅蒙商」の経済的実力、茶等の具体的交易商品、彼らの交易を支えた広義のインフラ状況に関する種々の資料を得ることが出来、本研究を進展させていく上で不可欠となる基本的な知見を獲得することができた。また、本研究課題の特徴を導き出す比較軸としての広西地域を中心とした各種ネットワークに関する現地調査も連携研究者（細谷良夫）により行われ、研究分担者を中心に収集された写真等データの、公開を念頭に置いたデジタル化も進める事ができた。

もう一つは、海外に所蔵される関連資料の収集である。研究代表者は、フランス国立図

書館等で所蔵されている主に満洲語の清代文献の調査を行い、「旅蒙商」の清朝統治における歴史的位置付けを考察する上で重要となる史料の収集も行うことができた。また、研究分担者は、国会図書館、東洋文庫を中心に、19 世紀末から 20 世紀にかけての中国東北地域における交易をめぐる諸資料の収集をおこなった。

（２）平成 23 年度

主な研究成果としては、後掲の研究発表の他に、次の二点をあげることができる。

一つは、交易ルートの踏査による成果である。研究代表者・同分担者と同連携研究者（華立、楠木賢道、杉山清彦、柳澤明）は、18-19 世紀における北アジアから東北アジアにかけての交易路中の「ハバロフスクーコムソモリスクナムーニコラエフスクーブイルーオハーユジノサハリンスク」のルートを踏査し、①アムール川下流域の民族が、南から北に向かってナナイ人、ウリチ人、ニブヒ人によって構成されていること、②これらの民族は言語学上の分類の枠組みを超えて漁労文化を共有し、民具・衣服の形態や紋様に類似点が多いこと、③アムール川河口一帯には元来ニブヒ族が住んでおり、1858 年の愛琿条約以降ロシア人の入植が続き、混血も進んだこと、④ブイル村で携帯した皇輿全覧図、ダンビルの地図などを調べ、そのままの村名で記載されていたことを見出し少なくとも三百年前には村が存在していたことと、同地でサンタン交易の存在を示す蝦夷錦を確認したこと、⑤また間宮林蔵の記憶を頼りに村上貞助が描いた樺太からみたブイル村図が正確であること、⑥20 世紀サハリンにおける先住民と移民朝鮮人の活動、などを確認し、その知見を深める成果を得ることができた。また、本研究課題の歴史的特徴考察に際しての比較軸としての西方ルートに関しても、ウルムチやカシュガルなどの満城を中心とした調査を連携研究者（細谷良夫）により行った。

もう一つは、上述踏査と並行して、ロシア語、モンゴル語、満洲語、漢語など多言語にわたる関連文献資料を収集できたことである。

（３）平成 24 年度

本年度は、主に、18-19 世紀清朝下で展開した主要な交易ルート中の、満洲と四川省地域におけるルートの現地調査を実施した。

満洲におけるルートに関しては、研究代表者と連携研究者（華立、柳澤明、楠木賢道、杉山清彦）が実施し、モンゴル人と漢人の交易ルートを中心に、「満洲里→新巴尓虎左旗（ホロン湖畔、新巴尓虎右旗）→ホロンバイル（ノモンハン、ジャライノール、大興安嶺）→チチハル」のルートで踏査を行い、清代における行政、貿易、遊牧、等に関わる多数の史跡（フルンブイル副都統衙門遺址、甘珠爾廟、碑文、等々）や各地の博物館を調査し、旅蒙商の活動実態、ホロン湖岸の新バルガ牧民の遊牧状況、同地域の交易ルート実態解明に資する多くの知見を得ることが出来た。加えて、19 世紀末以降、同地に進出してきたロシアや日本の史跡（東清鉄道、満鉄関係施設）の実査も行え、清代における交易ルートの 19 世紀末以降における変容要因に関しても知見を得ることができた。

四川省地域においては、連携研究者（細谷良夫）がおこない、「成都→漢源→磨西→瀘定（康定、塔公寺、居里寺、新渡橋）→二郎山→雅安（上里古、金鳳寺）」のルートで踏査を行い、清代の史跡〔茶葉古道、磨西天主堂、金花寺、瀘定橋、塔公寺（西蔵仏教寺院）、安覺寺（西蔵仏教寺院）、清真寺、居里寺（西蔵仏教寺院）〕や各地の博物館、更には自然景観や清代の都市遺構（磨西古街、上里古鎮）の調査を行い、同地での交易実態はもちろんのこと、交易の展開を支えた宗教的空間を含む現地の社会実態解明に資する多くの知見を得ることができた。

以上の３年間の調査の成果は、文献の記述内容との照合を通じて、文献記述内容を史実として確定していく上で、文献だけでは明らかにされ得ない点を示す有効な情報となるものであり、現地で新たに収集した資料と共に、今後の当該史研究を進めていく上で、大きな成果となった。

なお、その具体的な分析成果の一端は、後述の「５．主な発表論文等」で示す通りであるが、全ての踏査データの整理・公開は、３年間という研究期間では完遂できず、今後、継続した研究が必要となっていることも付言しておきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

①柳澤明、「1750～60 年代のキャフタ貿易と関税問題」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、査読なし、第 58 輯第 4 分冊、2013 年、5-18 頁。

②江夏由樹、「太平洋戦争前、満洲・内モンゴルにおける日本の羊毛生産計画：オーストラリアにおける日本企業の活動との関連から」、『アジア史学論集』、査読有、第 5 巻、2012 年、67-80 頁。

③中見立夫、「バボージャブの軌跡：“モンゴル独立”をめざし挫折した、ある内モンゴル人の実像」、『東洋史研究』、査読有、71 巻 2 号、2012 年、92(282)－125(315)頁。

④杉山清彦、「清代の北京と紫禁城――武人と文人、旗人と民人――」、『東京大学史料編纂所研究紀要』、査読無、第 22 号、2012

年、281-291 頁。
⑤杉山清彦、「イリ地域をめぐる帝国の興亡と国境の誕生――ユーラシアの中心から辺境へ――」、窪田順平（監修）承志（編）『中央ユーラシア環境史２　国境の出現』（京都：臨川書店）、査読無、2012 年、6-59 頁。
⑥華立、「清代新疆玉石交易中的商人与商路」、北京大学中国古代史研究中心編『輿地、考古与史学新説―李孝聡教授栄休記念論文集』(中華書局)、査読有、2012 年、236-258 頁。
⑦加藤直人、「“八旗値月檔”与清初《実録》的関係」(漢語)、『清史研究』、査読有、2011 年第 1 期、2011 年、117-123 頁。
⑧中見立夫、「19 世紀半ばから 20 世紀初頭における“東アジア”とロシア帝国―地域概念と国際関係」、『ロシア史研究』、査読有、第 88 号、2011 年、14－21 頁。
⑨楠木賢道、「清太宗皇太極的太廟儀式和堂子―関于満漢両種儀式的共処情況―」『清史研究』、査読有、第 81 期、2011 年、124-129 頁。
⑩柳澤明、「清代東北駐防八旗与漢人――以黒龍江地区為中心」、中国社会科学院近代史研究所政治史研究室編『清代満漢関係研究』社会科学文献出版社、査読無、2011 年、289-302 頁。
⑪杉山清彦、「女直＝満洲人の「くに」と「世界」――マンチュリアからみた「民族的世界」の姿――」、佐々木史郎・加藤雄三（編）『東アジアの民族的世界――近代以前における多文化的状況と相互認識』（東京：有志舎）、査読無、2011 年、147-177 頁。
⑫楠木賢道、「『両国会盟録』中所見志筑忠雄与安部龍平対清朝北亜之理解―江戸時代知識分子的“新清史”」、『民族史研究』、査読有、第 9 輯、2010 年、392-437 頁。
⑬加藤直人、「清初の文書記録と『逃人檔』」、『満族史研究』、査読有、第 9 号、2010 年、9-33 頁。
⑭見立夫、「あるロシア帝国外交官の数奇な運命と遺された史料：イワン・ヤコヴレヴィチ・コロストヴェツのモンゴル『日記』」、『Ｃｅｖｅｒ（セーヴェル）』［ハルビン・ウラジオストクを語る会］、査読無、26 号、2010 年、5-18 頁。
⑮江夏由樹、「東北アジア史の視点からみた羊毛をめぐる日本とオーストラリアとの関係」、『NEWS LETTER 近現代東北アジア地域史研究会』、査読有、第 22 号、2010 年、17-30 頁。
⑯柳澤明、「ロシアの東漸と東アジア――19 世紀後半における露清関係の転換」、『岩波講座 東アジア近現代通史 第 1 巻 東アジア世界の近代 19 世紀』岩波書店、査読無、2010 年、79-103 頁。
⑰杉山清彦、「明代女真氏族から清代満洲旗人へ」、菊池俊彦（編）『北東アジアの歴史と文化』（札幌：北海道大学出版会）、査読無、2010 年、457-476 頁。

〔学会発表〕（計 17 件）
①楠木賢道、“Perceptions of the Manchu Qing Dynasty during the Edo Period Japan”、The Nature of the Manchu Qing Empire and of its Relations with Other Polities in Asia、2012 年 12 月 6 日、プリンストン高等研究所。
②華立、「『異郷』から『家郷』へ －新疆における内地移民社会の出現－」、富山大学文学部主催合同シンポジウム「華人世界の拡大と天下意識」、2012 年 11 月 17 日、富山大学。
③楠木賢道、「満文档案所見噶爾丹死後清廷、蒙古王公及蔵伝仏教的関係」、『満蒙档案及蒙古史研究』国際学術討論会、2012 年 10 月 12 日、中国人民大学国学院。
④華立、「従档案記載看清代伊犂社会中的内地商民」、中央研究院主催『第四回国際漢学会議』、2012 年 6 月 22 日、中央研究院（台北）。
⑤江夏由樹、“Japanese Agribusiness in early 20th century Manchuria: A History of the Toa Industries Corporation (Toa Kangyo Kabushiki Kaisha)”、「第四屆國際漢學會議」、2012 年 6 月 21 日、中央研究院（台北）。
⑥江夏由樹、「近代中国的羊毛問題」、《東亜論壇：明清以来的中国》学術検討会、2012 年 5 月 19 日、復旦大学（上海）。
⑦松重充浩、「『外地』の日本語刊行物からみる華北:『朝鮮及満洲』を事例として」、(財)東洋文庫近代中国研究班「公開シンポジウム『華北の発見』」、2012 年 2 月 12 日、東洋文庫２Ｆ講演室。
⑧松重充浩、「満洲事変前ハルビンにおける中国側諸施策－中国側『記憶』の生成過程の実相」、日本大学文理学部人文科学研究所総合研究「近現代の歴史をめぐる「事実」と記憶」（研究代表者古川隆久）・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアにおける都市形成プロセスの統合的把握とそのデジタル化をめぐる研究」（研究代表者加藤直人）主催「《ミニ・シンポジウム》近現代の歴史をめぐる「事実」と記憶－ハルビンを事例として」、2011 年 12 月 10 日、日本大学文理学部 3 号館 3504 教室。
⑨柳澤明、「オイラド系諸集団のフルンボイル・満洲（中国東北）への移住について」、国際シンポジウム「オイラド・モンゴル研究の新展開」、2011 年 11 月 6 日、国立民族学博物館。
⑩中見立夫、“The Search for Building a

Nation State: The 1911 Declaration of Independence in Mongolia, Revised", The 10th International Congress of Mongolists, 9 August 2011, Ulaanbaatar: Төрийн Ордны Их Танхим.

⑪松重充浩、「日本『外地』における蔣介石認識の形成：満洲事変前大連日本人社会を事例として」、中央研究院近代史研究所主催「『蔣介石与現代中国再評価』国際学術研討会」、2011 年 6 月 28 日、中央研究院近代史研究所档案館。

⑫楠木賢道、「日本における満学研究の伝統と現状」、『満学的現況与課題』国際学術討論会、2011 年 4 月 15 日、韓国高麗大学民族文化研究院。

⑬楠木賢道、「江戸知識分子理解的清朝」、『満学:歴史与現状』国際学術討論会、2010 年 8 月 30 日、北京市社会科学院。

⑭楠木賢道、「太宗皇太極引進的太廟礼儀和堂子：満漢礼儀的共処情況」、『清朝満漢関係史国際学術討論会』、2010 年 8 月 28 日、中国社会科学院近代史研究所。

⑮柳澤明、「清代東北駐防八旗与漢人――以黒龍江地区為中心」、清代満漢関係史国際学術研討会、2010 年 8 月 28 日、中国社会科学院近代史研究所（北京）。

⑯楠木賢道、「江戸時代知識人の露清関係史研究―馬場為八郎が翻訳したローレンツ=ランゲの日記を中心に―」、第 46 回社会文化史学会大会、2010 年 7 月 31 日、筑波大学春日キャンパス。

⑰江夏由樹、「奉天地方社会有力者と清朝皇室―溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満洲国」高官たち」、第 22 回日中社会学会大会、2010 年 6 月 5 日、一橋大学。

〔図書〕（計 7 件）

①中見立夫、『「満蒙問題」の歴史的構図』、東京大学出版会、2013 年、304 頁。

②加藤直人・柳澤明・楠木賢道・杉山清彦・中見立夫・細谷良夫・松村潤、『内国史院檔 天聡五年 Ⅱ』、財団法人東洋文庫、2013 年、vii+153-614 頁。

③杉山清彦共著：羽田正（編）小島毅（監修）、『東アジア海域に漕ぎだす１ 海から見た歴史』、東京大学出版会、2013 年、289 頁。

④山田辰雄・松重充浩編著、『蔣介石研究：政治・戦争・日本』、東方書店、2013 年、総 564 頁。

⑤貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『20 世紀満洲史事典』、吉川弘文館、722 頁+90 頁+8 頁、2012 年。

⑥松重充浩分担執筆、武内房司編『日記に読む近代日本：５アジアと日本』〔(分担執筆標題)「榊谷仙次郎日記」〕、吉川弘文館、272 頁（分担執筆頁：184－203 頁）、2012 年。

⑦柳澤明・加藤直人・楠木賢道・杉山清彦・中見立夫・細谷良夫・松村潤『内国史院檔 天聡五年 Ⅰ』、財団法人東洋文庫、2011 年、xxiv+151 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

加藤　直人（KATO　NAOTO）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：90130468

(2)研究分担者

松重　充浩（MATSUSHIGE　MITSUHIRO）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：00275380

(3)連携研究者

細谷　良夫（HOSOYA　YOSHIO）
東北学院大学・文学部・名誉教授
研究者番号：50042164

江夏　由樹（ENATSU　YOSHIKI）
一橋大学・経済学研究科・教授
研究者番号：10194002

中見　立夫（NAKAMI　TATSUO）
東京外国語大学・アジア･アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：20134752

華　立（HUA　LI）
大阪経済法科大学･教養部･教授
研究者番号：20258081

柳澤　明（YANAGISAWA　AKIRA）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：50220182

楠木　賢道（KUSUNOKI　YOSHIMICHI）
筑波大学・人文系・教授
研究者番号：50234430

杉山　清彦（SUGIYAMA　KIYOHIKO）
東京大学・教養学部・准教授
研究者番号：80379213